905年、紀貫之によって編纂された「古今和歌集」には穏やかな日常的自然や生活、四季などの詩が詠まれています。
それらは日本人らしい、日本語らしい繊細で感性的な言い回しが多くなされ、日常に溶け込む当たり前や隠れた偶然の数々に気づかせてくれます。
しかし、その美しい感性はSNSの発展や時間に追われる社会、余裕のない生活などを背景に現代の日本に失いつつあり、都市のど真ん中なんてものはより目まぐるしいスピード感で変化を続けます。
そんな都市の真ん中に、忙しい中に一瞬時間も仕事も忘れる空間があってもいいではないか。鳥の鳴き声を聴く空間があってもいいではないか。子どもが遊ぶ姿を見て、昔を思い出す空間があってもいいではないか。

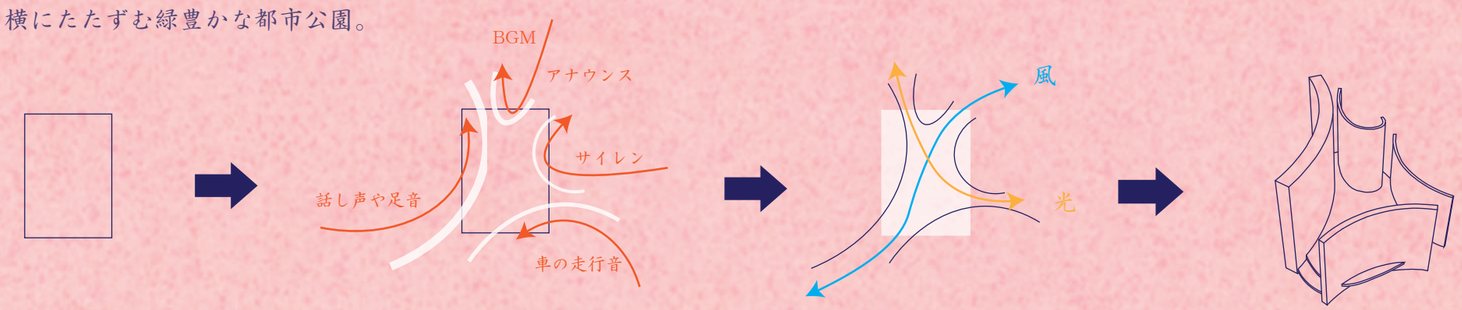
何にも邪魔されない時間を、ゆっくりと時間が流れる空間を目指しました。

感箱が創った天神の姿

感箱（かんそう）　時間の流れや季節の移り変わりなどカタチのない物事を感じる空間を表す。
感覚や感性を享受する空間。

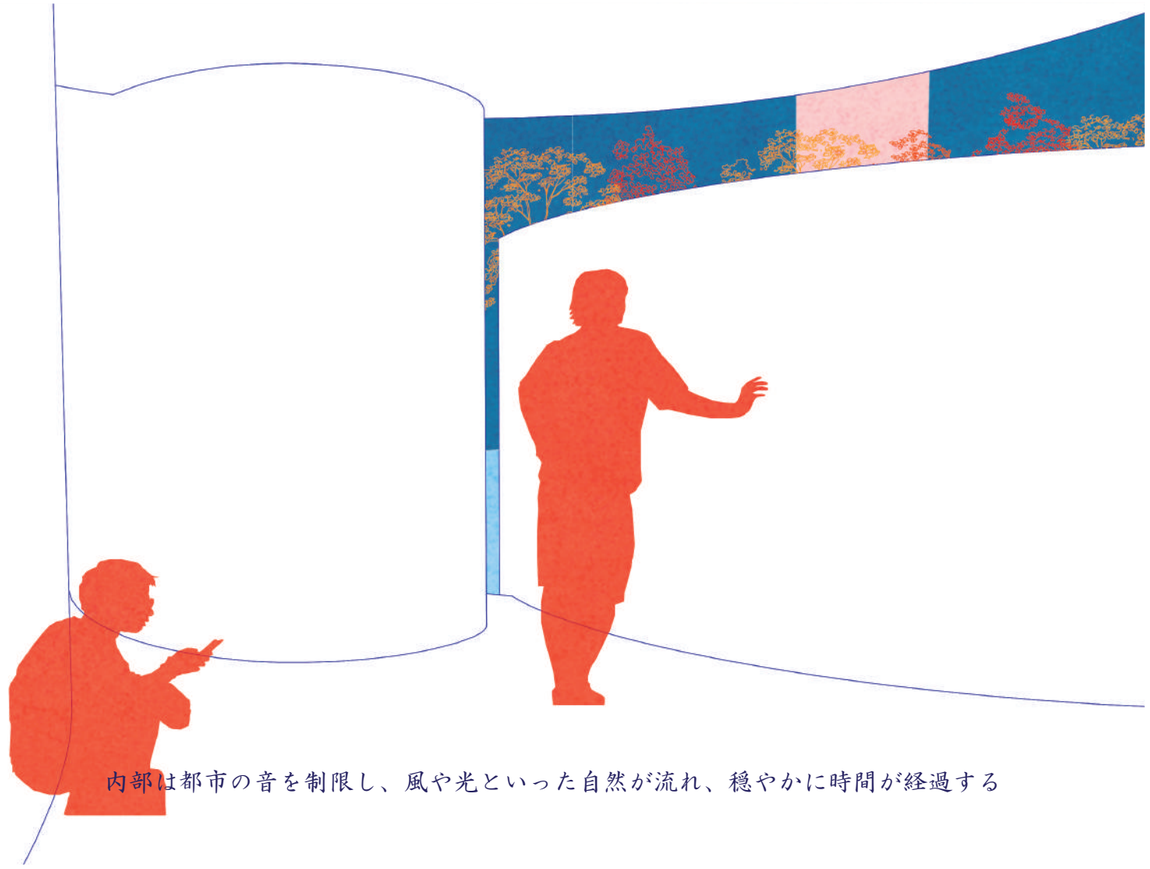
敷地は福岡市の中心、天神中央公園の一角に設定。
天神のビル群に四方囲まれ、日中は交通量と地下鉄の乗降客が多く、夕方になると屋台が立ち並び、夜は飲み屋街の賑わう横にたたずむ緑豊かな都市公園。

本設計では、日々の美しい感性と気づきで、穏やかな一瞬、一時、一日を提供するための東屋を提案する。
都市の環境音包み込むように受け止め、内部は自然が緩やかに流れる曲線の壁、音の振動や季節熱を感じる床スラブ、空や芝が淡く反射し時間の流れを感じる天井の３つで構成することで、感覚や感性を享受する空間を創出した。



都市の音を引き込む　　風や光が流れ込む　　これらを空間として創出する

壁から飛び出たスラブはベンチとなり、曲線の壁によって都市に流れる音を受け止める



内部は都市の音を制限し、風や光といった自然が流れ、穏やかに時間が経過する